

---

# 僕の彼女はメルヘンさん

となりがトトロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の彼女はメルヘンさん

### 【Nコード】

N1671S

### 【作者名】

となりがトトロ

### 【あらすじ】

僕の彼女はメルヘンさん。俗にいう天然ちゃんだ。一緒にいると柔らかい気持ちになれる。全てがすくすくしズレている僕の彼女との自慢話（日常）、聞いてくれない？

メ

高校二年の夏。

僕、杉浦拓也にはじめての彼女ができた。

彼女の名前は朝日茜。

あだ名はメルヘン。

なぜそんなあだ名なのかって？

じゃあそれについて少しだけ。

彼女の声はとても特徴的だ。

アニメチックというか・・・メルヘンチック。

透き通った高い声でどこにいてもすぐ耳に入ってくる。

そして、容姿。

すらっと長い足に華奢な体つき。

私服は主に淡色のワンピースでお花柄。

上にはこれまた淡色のベスト。

それを見るたびに、麦藁帽子をかぶせて、お花畑に連れて行ってあげたくなる。

極めつけは動き。

いつもぱたぱたしている。

友達と話しているときにぱたぱた。

先生と話しているときもぱたぱた。

体育のときだってもちろんぱたぱた。

断っておくが、メルヘンというあだ名は僕がつけたわけではない。

彼女の友達がつけたのだ。

抜群のセンスの持ち主だと思う。

だってメルヘン以外のあだ名はありえないんだから。

付き合うまでのいきさつ？

ちょっと恥ずかしいからこれも少しだけ。

僕たちの学校には居残り学習というものがある。

受験までまだ一年あるけど、県下でも有数の進学校である僕たちの学校では、二年生のうちから学校に残って勉強する人が少ない。

普段は僕も部活で忙しいのだが、その日は雨で部活がなかった。

教室で居残りをしていて、気づいてみると、残っているのは僕とメルヘンさんだけだった。

少しするとメルヘンさんは帰る仕度をして教室を出て行ってしまった。

一人残るのも寂しいので、僕も帰ることにした。

駐輪場に行くと、まだメルヘンさんがいた。

何か困っているようだった。

「どうかした？」

進んで女の子に声を掛けるタイプではなかったが、僕からしたら相手はおとぎの国の住人だ。

「自転車がないの。」

鍵はかけていただろうし、誰かが乗って行ってしまったという可能性は低かった。

「どんな自転車？」

そうして僕はメルヘンさんの赤い自転車を探した。

しかし、結局見つからなかった。

「家の人に迎えに来てもらったら？ 雨だしさ」

ん？雨？そういうえば朝から降っていたような……。

「メル……じゃなくて朝日さん。今朝どうやって来たの？」

「……あ！」

さすがはメルヘンさん。

「私昨日、自転車新しくしたんだっ」

さすがはメルヘンさん。

そして事件は解決した。

家が近いそうなので、二人で傘を差しながら、自転車を引いて帰った。

メルヘンさんの自転車は黄色だった。

その日を境に、僕とメルヘンさんはクラスでもよく話すようになった。

しばらくして、僕は彼女に告白した。

好きだ！ という感情よりも、もっと一緒にいたい！ という感情が強かった。

こうして僕は、おとぎの国の住人、メルヘンさんこと朝日茜さんと付き合い始めた。

彼女と付き合い始めて僕の生活はずいぶん変わった。

なんだか毎日、すごく体が軽い。

小さい子って寝る前におとぎ話とか読んでもらうよね？

そしたらすぐに眠りにつける。

きっと、お母さんお父さんの声や、その物語の内容から《安らぎ

》を受け取っているからだと思う。

僕にとってメルヘンさんは《安らぎ》そのものだ。

彼女が隣にいただけで、何も介さず直に《安らぎ》を感じられる。

だから、一緒にいればいるほど、もっともっと一緒にいたくなる。

あ、ちょっとのろけ過ぎちゃったかな。

とにかく毎日が楽しい。

初めてのデートの話をしようか。

僕はメルヘンさんと動植物公園に行った。

ホントは、コスモスやひまわりが咲き乱れる場所が良かったんだ

けど、最初のデートがそんなとこじゃあクサ過ぎると思ってやめた。

入り口で僕は彼女にプレゼントをした。

薄ピンクの帯が付いた麦藁帽子。

「わあ！ ありがとう〜！」

彼女は嬉しそうに被ってくれたが、きっとそれを見た僕のほうが、何倍も嬉しかったと思う。

その公園にはコスモス畑があった。

もちろん調べたから知っていたわけだが。

メルヘンさんとコスモスと麦藁帽子。

青と赤と黄色で信号みたいな一体感。

え？ 例えが悪い？

う〜ん……じゃあスイカとセミとソーダで夏のような一体感……。

まあとにかく僕の心は弾んだ。

「すつごく綺麗！ こんなにコスモスに囲まれたの初めて！」

彼女はばたばたしながら言った。

しかし僕は知っていた。

彼女が着ているワンピースの花柄はコスモスだ。

コスモスに囲まれるどころか包まれているではないか。

ま、それは置いといて、彼女は本当に楽しそうだった。

その姿は、純粹無垢、天真爛漫といった言葉がびったりだった。

お昼はコスモス畑が一望できるレストランに入った。

「こんなに景色がいいと、ただの水でもおいしく感じるね」

水の容器には「当店の水は 山の湧き水です」と書いてあった。

幸いにも、店員さんに気づかれてはいなかった。

僕はトマトパスタを、彼女はシーフードサンドを頼んだ。

「やつぱり魚もおいしい！」

この動植物園は山の中にあり、生けすがあるわけでもない。

山の中でシーフードサンドを出す店もどうかと思うが……。

メルヘンさんは微妙に全てがズレている。

けどそこが、メルヘンさんがメルヘンさんたる由縁だ。

帰りは彼女を家まで送っていった。

「今日はありがとう。ホントに楽しかった！」

彼女は裏表のない人間だと思う。

目を見れば分かる。

だから僕も100パーセント彼女の言葉を受け入れられる。  
一人帰り道。

彼女の全てが僕の体中を駆け巡っていた。

ル

初めて手をつないだ日のことでも話そうか。

夏休みの三分の一が終わった頃だ。

夏休みになると毎日補習授業や部活で途端に忙しくなった。

何日も言葉を交わせないことだってあった。

こんなとき、彼女は何を思っているのだろうか？

たまにそんなことをボーっと考えて、先輩に叱られた。

僕たちの町には花火大会がある。

なかなか二人になれる時間がなかったので、久しぶりのデートだった。

その日彼女はあじさい柄の浴衣を着ていた。

普段淡色ばかりのメルヘンさんが、艶やかな紫色の浴衣だったのだ。

それだけではなく、普段は下ろしている髪の毛を後ろで一つに縛っていた。

女の人してみれば、それだけのこともかもしれないが、男にとってそれは大事件だ。

「へ、変かなあ？」

彼女は恥ずかしそうにそう言った。

少し頬を紅くしたその表情がやけに乙女チックで可愛かった。

「すごく似合ってるよ」

彼女はさらに顔を紅くして、ぱたぱたしながら言った。

「拓也君も」

その日僕は一日中部活だったので、制服のままだった。

いまになって制服姿をほめられるとは思いもしなかった。

そして花火が始まるまで屋台を回った。

屋台の通りはすごい人ごみで、前に進むのもやっとだった。

しばらく歩くと急に人ごみが途切れた。



周りには屋台もなく人影もまばらだった。

「もう少し歩かない？」

僕と彼女はほとんど誰もいない砂利道を進んだ。

久しぶりに二人きりだからなのか、それとも彼女の格好がいつもと違うからなのか、少しだけ緊張した。

ヒュルルルルル……ドーン

とても心地よい音が体に響いた。

「きれ〜。」

彼女はそう言いながら僕の袖をつかんだ。

一瞬戸惑ったが、思い切ってその手を握った。

女の子と手を握るのは小学校の運動会でやったフォークダンス以来だと思う。

花火が終わるまでの約三十分間、手をつないだまま、二人で空を見上げた。

帰りにりんご飴を彼女に買ってあげた。

なぜかって？

想像してみしてほしい。

自分の好きな人がいつもと違う格好で、それが浴衣で、手にはりんご飴を持って……。

男の人になら分かってもらえるだろう。

え？ 綿菓子派？

それも考えたが、いまどきの綿菓子は袋に入ってしまったているのだ。

袋入りの綿菓子じゃあなんだかよく分からない。

予想以上に彼女は絵になった。

暗闇の中で屋台の灯りを背中に浴び、嬉しそうにりんご飴を舐めている。

「私ね、りんご飴のりんごって、元々この大きさだと思ってた。

……あ、でもすごく小さい頃だから！」

あわてて付け足したのだが、いつもそのくらいのことを平気で言

っている彼女が何を恥ずかしがることがあるのだろう、と思った。帰りは彼女を家まで送っていった。

その途中で彼女は言った。

「次はいつどっか連れてって来てくれるの？」

表情は見えなかったが少し声のトーンが低かった。

こんなメルヘンさんは初めてだった。

会えないとき、寂しいと思ってきてるのかなあって考えて思わずニヤけてしまった。

「そうだなあ……メル……じゃなくて朝日さんが寂しくなったら教えて。どこにでも連れてくよ」

ちよつと鎌を掛けたつもりだった。

「ほんと!？」

驚くほど素直に乗ってくれた。

「じゃあまた電話するね」

そう言っただけで彼女は家に入っただけでいこうとした。

「朝日さん」

僕は彼女が振り向いたところを携帯電話のカメラで撮った。

「あ〜！」

「おやすみ」

僕はそう言っただけで彼女に背を向けた。

その後ろでメルヘンさんはばたばたしていた。

もちろんこの日から僕の待ち受け画像はメルヘンさん浴衣ver.だ。

へ

僕とメルヘンさんは順風満帆でいつでも仲が良くて……なんて、さすがにそうはいかない。

夏休みが明けて少し肌寒くなり始めた頃。

僕は初めて彼女と喧嘩をした。

相手はメルヘンさんなのだから、妖精さんはいるかいなか、くらの喧嘩ならいいのだが、残念ながらもつと現実的な喧嘩だった。

高校二年の中ごろとは、最も面白い時期だと思う。

受験をさほど意識することもなく、部活はいよいよ自分たちも中心となり始め、友達もだいぶ多くなっている時期だ。

それに加え、文化祭の時期でもある。

だから、お互いにそれぞれの時間というのを尊重するようになった。

まあ、僕としてはちょっと寂しかったわけだが。

とりわけ彼女は遠慮をしてくれただとと思う。

その上、遠慮をしている風な素振りは見せず……

まあとにかく、彼女は僕のことをとても考えていてくれた。

それは分かっていた。

けど、言葉で伝えてくれない分、僕の不安や焦りは募った。

男とはとてもめんどくさい生き物だ。

踏み込まれ過ぎるのを嫌い、踏み込まれなさ過ぎるのを嫌う。

常に さくんぼすすんで、にほさくがっている状態を好む。

とりわけ僕はそのタイプだったのだ。

それまで毎晩のように電話をしていたが、その日数は減っていき、気づけば週に一回するかしないかになっていた。

さすがにこのままでは……と思った僕は彼女に電話で、明日会う約束をした。

別に会ってどうするということもないが、直接言葉を交わせれば何か変わるかもしれないと思った。

待ち合わせの場所と時間を伝えると

「分かった……」

と、彼女はくぐもった声で答えた。

翌日は午前中が部活の大会だった。

国公立に通う僕らが、私立に敵うわけもなく、いつものように午前で帰宅、その後彼女と……なんて思っていたが、その日は運が悪いのか悪いのか、決勝トーナメントまで進んでしまった。

遅くとも夕方までに帰らなければ、メルヘンさんとの約束が……なんて思っているときに限って、チームの調子はどんどん上がっていった。

優勝こそできなかったものの、三位となり、気づけばすっかり約束の時間は過ぎていた。

急いでバスと電車を乗り継ぎ帰った。

「ごめん！ 僕は急いだんだけど、電車が急いでくれなくて……」  
なんて、メルヘンさんみたいな言い訳を考えながら電車に揺られていると、突然雨が降り出した。

約束の時間からは優に二時間は過ぎていた。

昨日のこともあるし、帰っていてくれるかなとも思ったが、彼女のことだ。

この雨の中待っているというのも考えられる。

駅に着くと急いで約束の場所に向かった。

彼女は僕の予想通り……いや、予想以上だった。

雨の中ずぶ濡れになって立っていたのだ。

「もう、遅い！」

「……え……何で？」

「何でって、そういう約束でしょ！」

僕が言いたいのはそういうことじゃない。

なぜずぶ濡れなのかということだ。

「だって待ち合わせの場所ってここでしょ？」  
たしかにそうだが、一回家に帰って傘を取ってくるとか、屋根になりそうなもの下に逃げるとか。

「だって、ここ離れたら、拓也君が分からなくなると………思っ…  
…たか………」

最後まで言い切る前に、彼女は泣き出してしまった。

そこは小さなブランコが二つあるだけの小さな公園だった。

周りは田んぼばかりで、人通りも少ない。

雨の中こんなところで二時間以上も待たされたら、誰だって不安にもなるし寂しかっただろう。

反射的に僕は彼女を抱きしめた。

今思うと、我ながら大胆なことをしたと思う。

彼女の体は冷え切っていて、その温度から寂しさとか、怖さとか、不安とか、いろいろなものが僕の中に流れ込んでくる気がした。

そのときになって思えば、僕がそうだったように、彼女もずっと不安で、寂しかったのかもしれない。

今日呼ばれたのは、別れ話でも切り出されると思ったのだろうか。そんなことするはずがない！と、一人で勝手に熱くなった。

僕も気づけはず濡れだったが、遠慮することなく思いっきり抱きしめた。

「ヒック………。」

彼女は小刻みに震えながら泣き続けた。

彼女の腕が、僕の腰に回るのを感じて、さらに強く抱きしめた。

そして、彼女が泣き止んだ頃、雨も弱くなり、そして止んだ。

僕たちはまだ濡れているブランコに腰掛けた。

どちらも何を話したらいいか分からず、僕は小さな子どものように、ブランコを小刻みにゆすった。

「私ね………」

突然彼女が言った。

「友達からメルヘンって呼ばれてるの」

僕も呼んでいる、とは言わず黙って聞いた。

「おとぎの国に住んでそうなんだって」

彼女は微笑して続けた。

「いつも楽しそうだし、悩みもなさそうって言われるの」

微笑が苦笑いに変わるのが分かった。

「もしかしたら拓也くんもそう思ってる？」

僕は小さく首を横に振った。

「けどね、私だって不安なことがあるし、悩みだってあるよ……でも、拓也君といるときは、そういうこと全部忘れられる……。私、拓也君のこと大好きだよ」

僕の心の中で題名も分からない壮大なBGMが流れた。

足で地面を軽く蹴り上げるようにして、ブランコを大きく揺らした。

悲しいかな、そのときの抑えきれない感情を表現する方法はそれだけだった。

「ちよつとお、何笑っているの？」

思わず笑みがこぼれてしまっていたらしい。

「なんでもない。僕も……メルヘンさんのこと大好きだから」

素直な感情が言葉になりすぎて、思わず彼女のことをそう呼んでしまった。

「ああ！ やっぱり影で私のことメルヘンって呼んでたでしょ！」

「呼んでない呼んでない。でも、いいじゃん。メルヘンでも」

「良くない！ じゃあ、私も拓也君のことあだ名で呼ぶから」

「でも、僕あだ名ついたことないし」

「え〜、じゃあ……、拓也でもいいっ？」

僕はまた思わず笑ってしまった。

何をいまさら。

「いいよ。茜」

でも、そういえば僕も彼女を名前前で呼ぶのは初めてだった。少し新鮮な気持ちだった。

空に月が微笑む晩夏の公園で、濡れた学生服の二人は、ブランコから身を乗り出し、そしてキスをした。

ン

今日は二人の記念日だ。

いつもより服装に気を使い、いつもより多めにワックスを手にとった。

いつもと大して変わらないはずなのに、なぜか髪型が変な気がして、何回も髪の毛を洗い直し、気づけば5回目のワックスを手にとっていた。

家を出るとき、結局僕は帽子をかぶっていた。

約束の時間までまだ一時間近くあった。

霜の降りた道端の草が、朝日に輝き、柄にもなく思わず見入ってしまった。

一つ、大きく深呼吸をした。

冬の朝の冷気を帯びた空気が肺いっぱいにはびこった。

「よし！」

僕は小さく拳を握りしめ、歩き始めようと足を上げたとき、近所のおばさんと犬が不思議なものを見る目で僕を見ていた。

約束の公園に着いたのは、待ち合わせ時間の三十分くらい前だ。

僕がかばんの中に入っているそれを、何度も見て、そのたびに緊張が増し、それでもまた見て……気づけば彼女が僕の前に立っていた。

「おはよう。待たせちゃった？」

「おはよう。全然。今来たところだから」

「三十分も前に来たの？」

彼女はクスツと笑った。

最近彼女は僕を困らせるのが好きなようで、今日もおそらく近くで一時間くらい前から隠れていたのだろう。

やるこゝろがまるで子どもだ。



「じゃあ、行こうか」

僕は彼女の質問には答えず、彼女を置いて歩き始めた。

「ちょっと待ってよ〜！」

急いで後ろから追いかけてくる彼女と同じ距離を保つように、僕も走った。

まったく、いったい僕たちはいくつなんだろうか……。

僕たちは電車に乗って田舎から街へ向かった。

休日の朝とあって比較的空いていた。

窓の外の茶色や緑色の風景の中に、所々無機質な灰色の建物や道があつて、空の青が余計に映えて見えた。

時間が経つにつれて、だんだんと灰色の割合が大きくなり、目に映るもの全てが灰色になった。

なんとも寒い時代だと思った。

僕の毎日も、彼女がいなくなったら、この寒さに飲み込まれてしまふのだろうか。

毎日のように見ている景色を見て、そんな風に思ってしまうのは、いつも以上に彼女のことを意識しているからだと思う。

隣で同じように窓の外を眺める彼女は、いったい何を思っているのだろうか。

「ねえ拓也。あの雲、ベーグルみたい  
なぜベーグルなのだろうか。」

ドーナツとかタイヤとかいろいろあるだろうに。

そういえば最近、巷ではベーグルがブームなようで、毎日のようにテレビでベーグルを見た。

おそらく彼女はそのとき、それを思い出してベーグルが食べたくなつたのだろう。

僕と彼女の思考はまるで違う。

このビル群からわずかに覗く雲に目が行くところが、彼女と僕の大きな違いを端的に表していると思った。

僕は今まで彼女のこういうところに、何度も救われた。

苦しかったり、つらかったりしたとき、僕の思いもよらぬ視点から、その気持ちを和らげてくれた。

「お昼はベーグルにしようか。」

「え？ ……べ、別にそういうわけで行ったわけじゃ……」

彼女は少しすねた表情を見せた。

僕は彼女の笑っている顔を見るのも好きだが、少し俯いた、この無防備な幼さのある表情がすごく好きだった。

駅について、改札を出て、ウィンドウショッピングをしながら街中を歩いた。

「ねえ、あれ着てみない？」

「あ、あの帽子似合いそう」

彼女はなぜか、自分のものそっちのりで、僕に着させる服を選んでいた。

そんなに僕のファッションに問題があるのだろうか？

彼女曰く、「自分のいいと思ったものを着てもらいたい」そうだ。

まあ僕もそれなら次回は服装に困らないわけで、彼女の薦めるまま二着の服と帽子を買った。

「何か選びなよ。プレゼントするから。」

「ほんと!?!? じゃあねえ……」

僕としては、たまには何万もする服をプレゼントしたいのだが、彼女は決まっただけ、そんなものでいいの？ というようなものを選ぶ。

一度サプライズでプレゼントしたことがあるのだが、喜ぶというよりは、困っているといった表情だった。

どうやら本当にお高いプレゼントはいらならしい。

「じゃあ、これ！」

結局この日も彼女が選んだのは、薄いピンクのニット帽だった。

彼女はそれを買って外に出ると、さっそく被って一回転して僕に

見せた。

「どう？ 似合う？」

昔僕は彼女に麦藁帽子をプレゼントしたことがあったが、そのときと同じような感情がこみ上げてきた。

「うん。すごく似合ってるよ」

彼女はぱたぱたしながら嬉しそうに僕の手を握った。

お昼は約束どおりベーグルの専門店に入った。

彼女は念願のそれを口にし、満足気だった。

「やっぱり食べたかったんだ。」

「……昨日テレビで見たから。」

あの表情が見られて、僕は満足だった。

「次、どこ行こっか？」

彼女は聞いた。

「映画でも見ない？」

たまたま見たい映画があったので、彼女に付き合ってもらうことにした。

ファンタジー系の映画で最後のオチで思わず涙腺が緩んだが、なんとかこらえた。

劇場を出たとき、彼女の目は少し腫れていたが、あえて突っ込まないでおいた。

さすがにそこまで子どもではない。

見上げると空は夕焼けに染まり始めていた。

その後僕たちは、もう一度ショッピングを楽しんで、夜はちょっとおしゃれなイタリアンレストランに入った。

彼女はカルボナーラをいつも頼むのだが、今日はトマトと何とかの何とかかんとか、とかいう、ちよっとおしゃれなものを頼んだ。

「カルボナーラじゃないの？」

「カルボナーラは卒業。ちよっと大人になったの」

「じゃあ、今日は僕がカルボナーラにしようかな」

別にカルボナーラを子どもっぽいと全然思わないが、彼女の少し気にしていたのだろう。

数分後。

料理が運ばれてきて一口食べた彼女は、トマトの酸味が強かったらしく、一瞬静止し、僕のカルボナーラは彼女の前に移動した。

「無理するから」

「無理じゃないもん。……おいし」

僕たちは夕食を済ませた後、電車に乗って帰ろうと改札まで来たが、なんとなく彼女は寂しい表情だった。

いつもなら僕もそうだ。

しかしこの日はそれよりも、かばんの中に入っているもののせいで、緊張が勝っていた。

「い、行こうか」

「うん」

電車の中で今自分が何を話しているのか、彼女が何の話をしているのか全く分からなかった。

暖房の効いた車内は真夏よりもはるかに暑く感じた。

「顔、赤いよ？」

「え、……あゝ、ちょっと暖房効きすぎかな。はは」

「？」

彼女は怪訝な顔をしたが、また元の話に戻った。

駅に着くまでの時間はあっという間だった。

僕はさりげなく、

「ちょっと歩かない？ 暑いからさ」

と言って、公園まで歩いた。

公園に着くと情けないことに、ブランコに座って一時間近く世間話をした。

切り出すタイミングは何回もあったが、口は動けど声が出なかつ

た。

「あ、雪だ」

神は応援しているのだろうか？それとも急かしているのだろうか？  
ほとんど胸の鼓動は速くなった。

手がゆっくりとかばんの中に入っていた。

お目当てのそれに指の先が触れたとき、バラエティー番組の箱の  
中身を当てるクイズのように、ビクツと体が震えた。

彼女は空を見上げながら、言った。

「ねえ、雪が降るなんて久しぶりだね」

僕はもう一度、今度はしっかりとそれをつかんで、

「明日積もるかなあ」

ゆっくりとかばんから手を抜いて、

「もつといっぱい降ったら、明日会社行かなくて済むかもしれない  
いのね」

それを目でしっかりと確認してから、一つ小さく深呼吸をして、

「ねえ」

そして、彼女の言葉をさえぎって、僕は言った。

「結婚しよ！」

時間が止まったような感覚とはまさにこのことだと思った。

一切の物音は消え、舞い降りる雪だけが、この世界に時が流れて  
いるのを感じさせた。

彼女は虚を突かれたような表情をしていた。

けれど、その表情にはだんだんと喜色が表れ、半分泣きそうな顔  
になりながら言った。

「うん！」

その澄んだ声は、真つ暗な田舎の公園から波状に拡がり、田畑は  
実り、草木は生い茂って、花が咲き乱れ……るようなイメージが僕  
の中に拡がった。

彼女は僕に飛びつき、その勢いに押されてブランコから落ちてし  
まった。

それでも彼女はお構いなしに抱きしめてきたので、そのままの格好で僕も彼女を抱きしめた。  
今日は僕たちの十年目の記念日だ。

## ン（後書き）

読んでくださった方々、本当にありがとうございました。

もう少し細かく改編しようかなと考えていますので、参考のため、よろしければ感想や評価などよろしくおねがいします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1671s/>

---

僕の彼女はメルヘンさん

2011年10月8日22時13分発行